

大板井遺跡 31

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第 358 集

2024

小郡市教育委員会

序

小郡市は近年地理的環境を背景に、ベットタウンや工業団地をはじめとするさまざまな開発により発展を続けています。それに伴い住宅地の建設が相次いで行われています。

大板井遺跡は、小郡市大板井に所在し、大正12年（1923）九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士により紹介された学史的に有名な遺跡です。昭和56年（1981）の第1次調査を皮切りにこれまで30次にわたって調査が行われてきた小郡市を代表する遺跡です。

今回の調査では古代の土坑と溝が見つかり、隣接する小郡官衙遺跡との関係性が確認されました。今回得られた成果が今後永く活用され、この報告書が文化財愛護思想の普及に寄与することになれば幸いです。

最後に、現地発掘調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

令和6年3月31日

小郡市教育委員会
教育長 秋永 児生

例言

- 1、本書は、福岡県小郡市大板井に所在する大板井遺跡 31 区の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は株式会社 C & C 代表取締役行武忠孝氏から委託を受け、小郡市教育委員会が実施した。
- 3、調査期間は、令和 4 年 8 月 8 日から令和 4 年 10 月 12 日まで実施した。調査面積は 650 m²である。
- 4、遺構の実測は調査担当者と柏原孝俊、一木賢人、藤木寅央(別府大学学生)、矢野棟馬(別府大学学生)、久住愛子、林知恵、宮崎美穂子、牛原真弓が行い、遺物実測は調査担当者が行い、遺物トレースは林知恵、遺構デジタルトレースは宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子、永富加奈子、牛原真弓、佐藤優子、久佐木美樹が行った。
- 5、遺構の写真撮影は調査担当者が、遺跡の空撮は(有)空中写真企画、遺物の写真是(有)システム・レコが行った。
- 6、本書で使用する遺構の略号として以下を用いて表示している
SC : 積穴住居 SK : 土坑 SD: 溝 SP : ピット
- 7、遺物・実測図・写真是小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
- 8、本書の執筆・編集は高橋涉が行った。

本文目次

第1章 調査の経過と組織	1
1、調査に至る経緯	
2、調査の経過	
3、調査組織	
第2章 位置と環境	2
1、地理的環境	
2、歴史的環境	
第3章 遺構と遺物	7
第4章 総括	15

挿図目次

第1図 大板井遺跡 調査地位置図 (S=1/5,000)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	4
第3図 大板井遺跡 31 全体図 (S=1/200)	5・6
第4図 1号竪穴住居 実測図 (S=1/40)	8
第5図 1・2号土坑 実測図 (S=1/40)	9
第6図 3号土坑 実測図 (S=1/40)	10
第7図 4号土坑 実測図 (S=1/40)	11
第8図 1号溝 実測図 (S=1/40)	13
第9図 1・2号溝 実測図 (S=1/40)	14
第10図 1・4号土坑 1号溝 3号ピット 出土遺物実測図 (S=1/4)	15
第11図 大板井遺跡 周辺調査地検出遺構 (S=1/800)	17・18

表目次

表1 大板井遺跡 31出土遺物 観察表	16
---------------------	----

図版目次

図版卷頭

調査区上空から小郡官衙遺跡を臨む（矢印部分が小郡官衙遺跡）

図版 1

- ① 調査区全景（上空から） ② 北側全景（上空から）

図版 2

- ① 南側全景（上空から） ② 調査区中央 全景（南から）
③ 南側調査区 全景（北から） ④ 南側調査区 全景（東から）
⑤ 北側調査区 全景

図版 3

- ① 1号竪穴住居 ② 1号土坑 土層断面
③ 1号土坑 ④ 2号土坑
⑤ 3号土坑 土層断面 ⑥ 3号土坑
⑦ 4号土坑 土層断面 ⑧ 4号土坑

図版 4

- ① 1号溝 北壁土層断面 ② 1号溝 東側
③ 1号溝 西側 ④ 2号溝

図版 5

出土遺物

第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯

小郡市大板井に所在する大板井遺跡は、市内の遺跡の中でも比較的早い時期に本格的な発掘調査が実施された遺跡である。昭和50年代から現在まで30次の調査が実施され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生時代中期～後期にかけての集落跡が確認されており、多くの竪穴住居や祭祀土坑、甕棺墓が検出されるなど、当時の中核的な集落であったと考えられている。

大板井遺跡31次調査は住宅地建設に先立つて株式会社C&C代表取締役行武忠孝氏より「埋蔵文化財の有無に関する照会」が提出されたことに始まる。これを受け試掘調査を実施した結果、埋蔵文化財の存在を確認したため、発掘調査による記録保存が必要な旨の回答を行った。その後、施工業者と小郡市教育委員会で協議し、令和4年度事業として発掘調査を実施し、令和5年度に発掘調査報告書を刊行することで同意を得た。

2. 調査の経過

発掘調査は令和4年8月8日から10月12日にかけて実施した。以下、調査の経過を調査日誌から抜粋する。

8/1 現場で打ち合わせを行う。8/8～10 調査区の網張りをし、表土掘削を開始する。8/22 遺構掘削を開始する。別府大学学生藤木寅央君・矢野稜馬君・山上尚也君参加。ポンプを使いながら排水を行う。北側から調査を開始する。土坑、ピット、倒木痕、溝を確認。遺構密度は低いと思われる。8/23～8/25 北側の掘削を行う。8/26 南側の掘削を開始する。9/5～6 台風11号が接近。台風の影響でハウスとトイレが強風により動く。9/7 引き続き南側の掘削を行う。土坑3基を確認。9/15～16 空撮に向けて清掃を開始する。9/17 空撮を行う。台風14号接近。台風に備えハウス・トイレの固定を行う。9/20 現場を確認する。台風による被害なし。南側から実測を開始する。9/21～9/29 全体図の実測を行う。10/4 のこる部分の表土掘削を行う。それと並行して埋め立てを行う。溝2条、竪穴住居1軒、ピットを確認。掘削を開始する。10/4～5 遺構掘削を行う。掘削が終了した部分から写真撮影を行う。その後全体写真を撮影し、遺構掘削終了。道具の撤収を行う。10/6・7 残る部分の実測を行う。10/11 埋め戻しを行う。埋め立てと並行しながらハウス、トイレの撤去を行う。10/12 道具とブルーシートの洗浄を小郡市埋蔵文化財調査センターで行う。調査区の埋め立てが終了する。10/13 調査の終了を業者に連絡し、調査を終了する。

3. 調査組織

〔令和4年度 調査 令和5年度 整理作業〕

小郡市教育委員会 教育長 秋永晃生

教育部長 藤吉 宏（令和4年度） 熊丸 直樹（令和5年度）

文化財課 課長 杉本 岳史

係長 山崎 賴人

技師 高橋 渉（調査・整理担当）

発掘作業員

西初代 山本義夫 陶山博 吉岡広志 工藤敬可 田嶋道博 宮原道治 元石みつ 黒田祐治
奥歴裕二（小郡市在住）（順不同）
藤木寅央、山上尚也、矢野稜馬（別府大学学生）

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

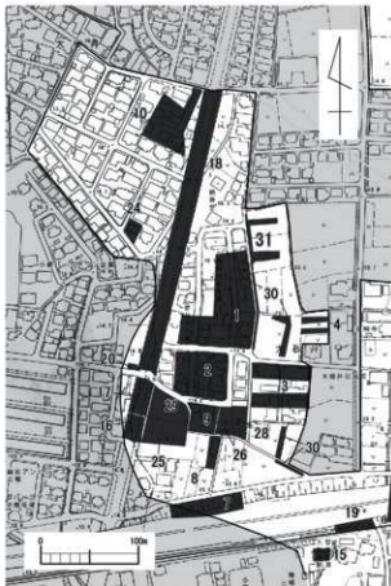
小郡市は福岡県の中央部に位置し、博多湾から南へ25km程の内陸部にあたる。市域は東西6km、南北12km、総面積45.5㎢を有する南北に長い行政区をもつ。宝満山を水源とする宝満川により東西に二分され、その西岸は脊振山系から派生する丘陵部（通称、三国丘陵）を頂部として低位段丘が南へ向かって伸び、沖積地を経て筑紫平野へと連なる。大板井遺跡はこの三国丘陵から緩やかにつながる低台地上に位置している。遺跡は幅の広い舌状の台地に展開しており、その範囲は南北約1.3kmに及ぶ。

2. 歴史的環境

大板井遺跡（1）は早くより知られる遺跡であり、大正12年（1923）に九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士によって『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』という論文で紹介された学史的に著名な遺跡である。昭和年間から継続的に発掘調査が行われ、今回の調査で31次の調査を数える。以下、周辺地域に分布する遺跡を中心に歴史的環境の概要を示す。

小郡市内における旧石器時代の遺跡は非常に少ないが、三沢丘陵、夜須高原南麓、花立山周辺でナイフ形石器が確認されている。続く縄文時代においても遺跡・遺構の確認例は非常に少ない。干潟遺跡群（2）の落とし穴状遺構、大崎井牟田遺跡（3）の縄文時代早期と考えられる集石遺構などが確認されているがその数は少ない。

弥生時代前期前半には遺跡が少ない。津古土取遺跡（4）で集落が形成され、三国の鼻遺跡（5）では土坑墓、木棺墓、甕棺墓の墓地群が確認されている。弥生時代前期後半になると遺跡が急増し、特に一ノロ遺跡（6）をはじめとする三国丘陵での遺跡の増加が著しい。弥生時代前期末になると横倉鍋倉遺跡、横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡（5）などで朝鮮系無文土器が出土する集落が存在し、大陸との強い関係が伺われる。三国丘陵を中心とした集落は、弥生時代中期になると大板井遺跡周辺に拠点を移す。この時期が大板井遺跡の最盛期であり、西に隣接する小郡遺跡（7）、小郡若山遺跡とともに当時の中枢的な集落を構成していたと考えられる。大板井遺跡の各所でこの時期の住居や墓域、祭祀



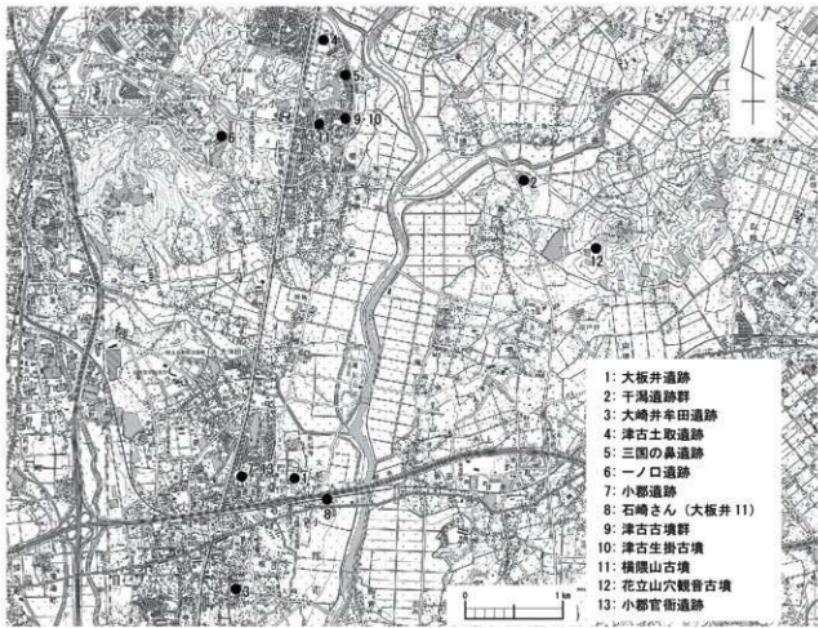
第1図 大板井遺跡 調査地点位置図
(S=1/5,000)

土坑など多様な遺構と共に共伴する遺物が発見されている。前述の巨石については現在「石崎さん」という名前で呼ばれ、「穢せばたたりがある」と地元の人々の信仰の対象となっている。1992年（平成4年）に九州大学と小郡市教育委員会によって発掘調査が行われ、巨石の下に甕棺墓を確認している（大板井遺跡11次調査）（8）。そして、1935年（昭和10年）、基山から甘木に鉄道が敷設され、その軌道敷きの土取りが行われる最中に銅戈7本が発見された。現在そのうちの2本を九州歴史資料館が、ほかの2本を小郡市教育委員会が保管している。そして昭和55年（1980年）に行われた大板井遺跡1次調査ではI区北側で長さ35mに及ぶV字溝が確認されている。その深さは最高で2m、幅3mを測り北側に続く台地を切断する意味があったと考えられる。その後令和3年（2022年）に行われた30次調査でV字溝の南側を確認した。環濠の南側では遺構密度が高く、北側では低い傾向がみられた。さらに隣接する小郡遺跡は同時期の大型円形住居が確認され、小郡若山遺跡では多錐細文鏡2面を甕型土器とともに埋納したビットが見つかっており、当時のこの地域の権勢を垣間見ることができる。

古墳時代前期になると、三国丘陵上に津古古墳群（9）が出現する。津古生掛古墳（10）からは船載の方格規矩鳥文鏡や鶴型土製品が出土している。また、平地の大崎・寺福童地区では外來系土器が大量に出土する集落・墓地が出現するなど、近畿地方から強い影響を受けていたと考えられる。古墳時代中期になると前方後圓墳である横隈山古墳（11）が出現する。古墳時代後期になると三国丘陵上に数多くの集落が営まれる。さらに花立山山麓には300基を超える古墳や横穴墓が築かれる。中でも花立山穴観音古墳（12）は地域最大の前方後圓墳で、石室に線刻を持つ装飾古墳としても有名である。

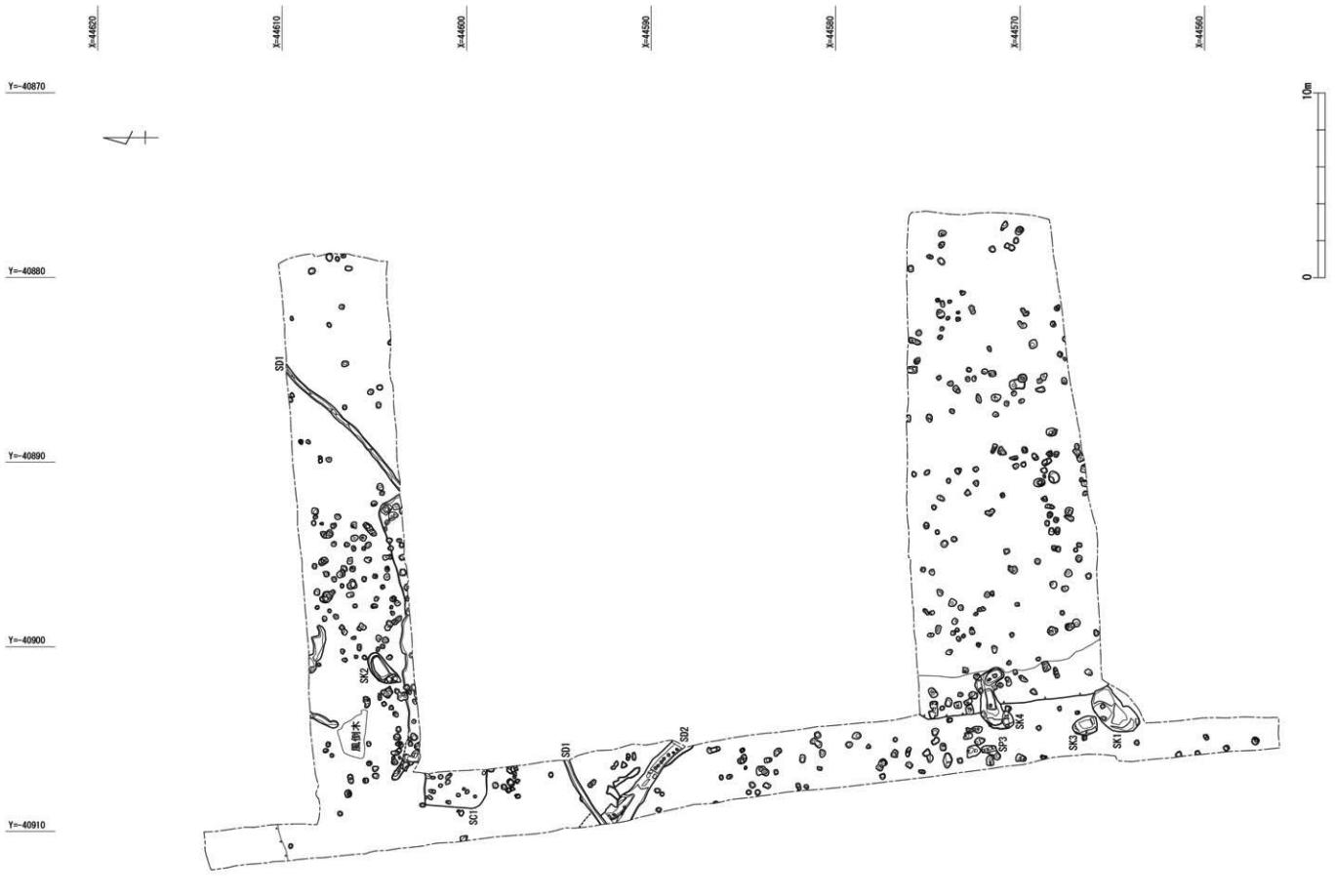
律令期には筑後国御原郡の郡役所に比定されている国指定史跡小郡官衙遺跡（13）（小郡官衙遺跡群小郡官衙遺跡 上岩田遺跡）が成立する。現在の「大板井」という地名は平安時代の書物である『和名抄』に記された御原郡4郷のうちのひとつである「板井」に由来すると推測されている。大板井遺跡10次調査では「正倉」とみられる3×4間規模の総柱建物が3棟発見され、18次調査では官衙の正倉群やその関連施設と推定される版築状盛土による造成跡などが見つかるなどこの時期に官衙隣接地として再び隆盛を迎えたと思われる。さらに本調査区の南側の30次調査や周辺の調査でも同時期の遺構を数多く確認しており、官衙の周辺地域として盛行していたと考えられる。

中世以降も集落は連綿と続き、現在でも多くの人々が立ち並ぶ地域である。



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3図 大板井遺跡31 全体図(S=1/200)



第3章 遺構と遺物

調査区は、大板井遺跡の既調査区が密集する地域にあたり、弥生時代中期の集落及び古代の遺構を確認している。西に小郡遺跡（小郡官衙遺跡）を臨む。本調査区は30次調査区の北側に位置する。遺構の掘り込みは褐色ローム（基盤層）で、遺構面は標高13.2～13.4m前後を測る。

検出した遺構は、竪穴住居1軒、土坑4基、溝2条、ピットを確認した。以下、遺構ごとに説明を行っていく。

1号竪穴住居（第4図 図版3①）

調査区西側で検出した竪穴住居であるが、削平がひどく貼床下層の一部を検出したのみである。埋土は黒褐色土と黄褐色土が混じっている。主軸は北東～南西方向で平面は隅丸方形を呈する。住居の東側は調査区外に延びる。現状で長軸3.35m、短軸2.0mを測り、深さは5cm程度である。検出時に一部貼床が残存している程度であり、貼床の下層に楕円形や正円形のピットを15基確認した。そのうち2基の主柱穴を確認した。遺物は土師器の小片が出土した。

1号土坑（第5図 図版3②③）

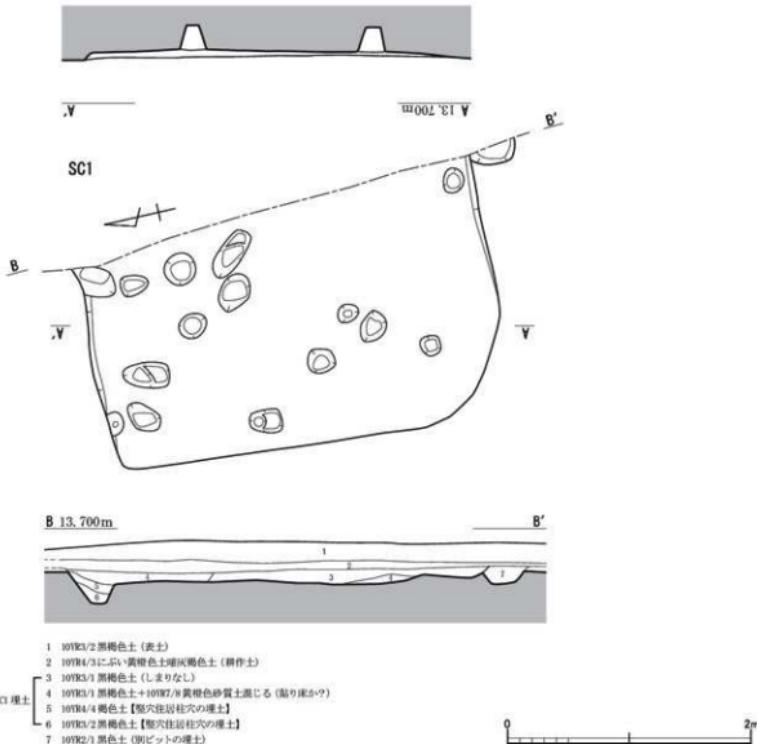
調査区南側で検出した土坑で、平面は隅丸楕円形を呈する。長軸3.1m、短軸1.4m、深さは1m程度である。西側に複数のテラスを有し東側に向かって階段状に下り、中央が一番低くなっている。埋土は上層に炭と遺物の小片を含む黒褐色土が堆積し、下層には地山由来の黄橙色土が堆積している。遺物は土師器と須恵器が出土している。

出土遺物（第10図 図版5）

1は高台がつく須恵器の壺である。復元口径11.8cmを測り、非常に丁寧なつくりである。外面の口縁部から高台全体にかけて灰かぶりであり、一部は赤変している。2は土師器の鉢である。口縁部を巻き込むように整形している。復元口径28cmを測る。外面はナデ、口縁部内側はヨコナデ、胴部はケズリを施している。

2号土坑（第5図 図版3④）

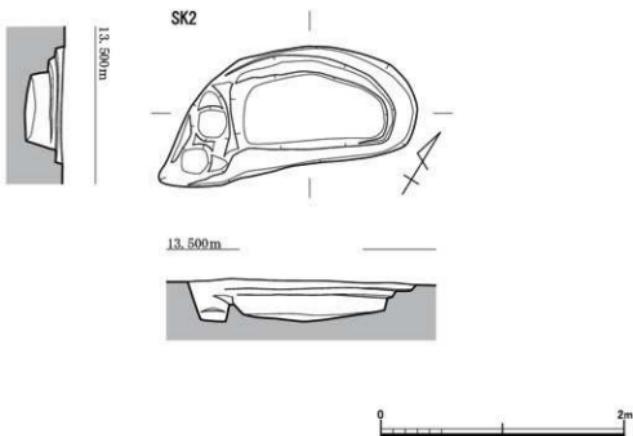
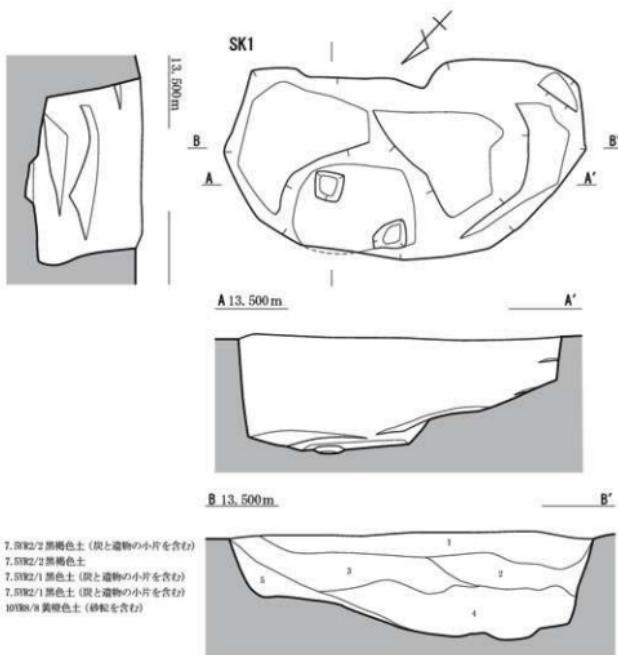
調査区北側で検出した土坑で、平面は円形を呈する。長さは長軸1.9m、短軸1.0m、深さは0.4mを測る。東側は複数のテラスを有し段状に下る。中央部が隅丸方形状に窪み、西側はピット状の掘り込みを有する。中央部の床面は水平である。そして床面の一部には黒褐色土の掘り込みが認められる。遺物が出土していないため時期は不明である。



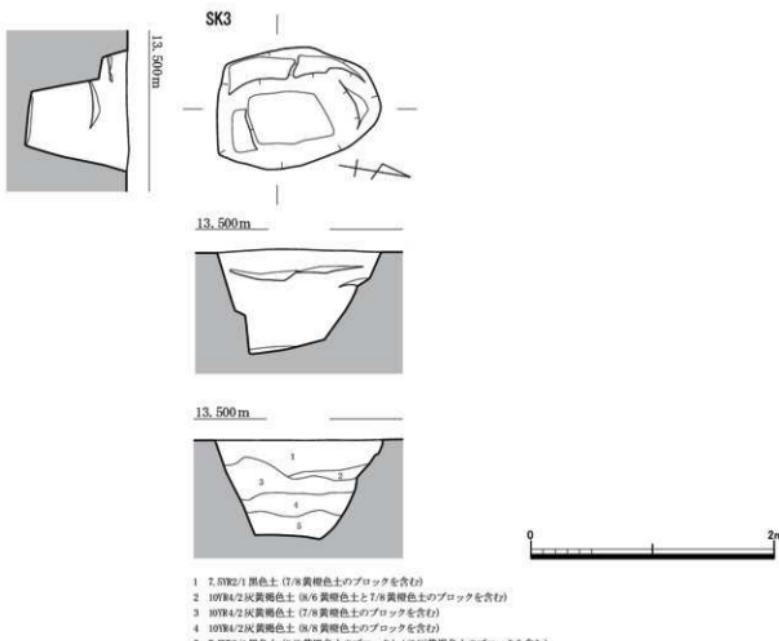
第4図 1号堅穴住居 実測図 (S=1/40)

3号土坑（第6図 図版3⑤⑥）

調査区南側で検出した土坑で、1号土坑の西側に位置する。平面は円形で、規模は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.95mを測る。西側にテラスを有し、中央に向かって急激に落ちる。中央部は隅丸方形で床面は水平である。中央部の規模は長軸0.7m、短軸0.4mを測る。上層と下層に黒色土が堆積し、中層に黄褐色土が堆積する。遺物は土師器と須恵器が出土している。



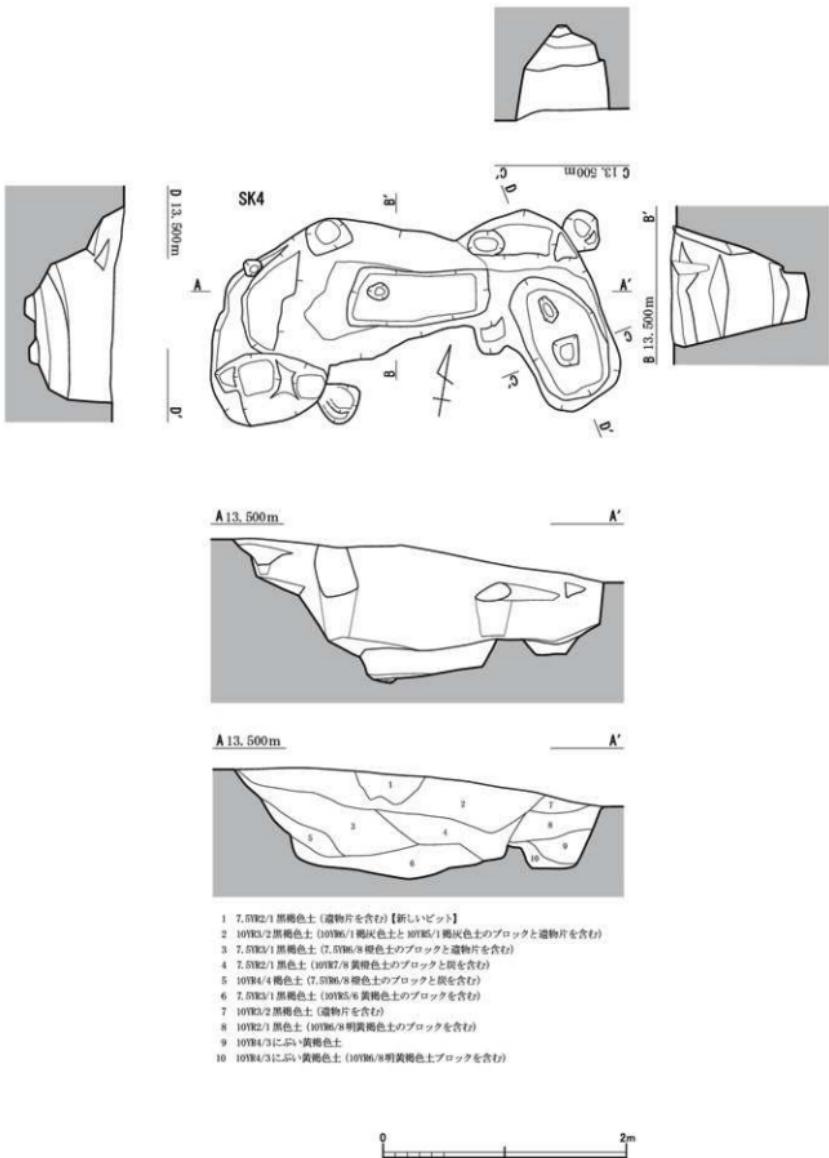
第5図 1・2号土坑 実測図 (S=1/40)



第6図 3号土坑 実測図 (S=1/40)

4号土坑（第7図 図版3⑦⑧）

調査区南側で検出した土坑で3号土坑の北側に位置する土坑である。隅丸方形を呈する土坑で、土坑が2基重なっている。東側の土坑が西側の土坑を切っている。また南西側はピットにより掘り込まれている。規模は西側の土坑で長軸2.2m、短軸0.9m、深さ1.1mを測る。一方東側の土坑は長軸1.7m、短軸0.8m、深さ0.7mを測る。西側の土坑は中央部が長方形状を呈する。床面は長軸1.0m、短軸0.4mである。一方東側の土坑については隅丸方形状を呈する。西側の土坑については、上層に遺物を含む黒褐色土が堆積し、下層は黒褐色土に黄褐色土が混在する。一方東側の土坑では、上層に遺物を含む黒褐色土が堆積し、下層にぶい黄褐色土が堆積している。遺物は土師器と須恵器が出土し、最下層から須恵器の坏蓋が出土している。



第7図 4号土坑 実測図 (S=1/40)

出土遺物（第10図 図版5）

3はつまみがつく須恵器の坏蓋である。復元口径14cmを測る。内面は回転ナデ、外面口縁部は回転ナデ、天井部付近は回転ヘラケズリにより調整している。4は土師器のつまみ付きの坏蓋である。最下層からの出土である。復元口径14.4cm、器高2.9cmを測る。内面はナデ、外面はミガキにより調整する。5は土師器の甕である。復元口径15.4cmを測る。口縁は緩やかに屈曲している。6は土師器の把手付の甕である。復元口径23cm、残存高23.2cmを測る大形の甕である。外面はハケメ、内面はケズリにより調整している。

1号溝（第8・9図 図版4①②③）

調査区の北東から北西にかけて検出した弧状の溝で標高は13.1m前後である。東側と西側への延長は調査区外に及ぶ。検出した長さは11.6m、幅0.4m、深さは15cmから20cm程度である。

出土遺物（第10図 図版5）

7は土師器の甕である。復元口径20cmを測る。口縁部の屈曲が比較的大きい。外面をハケメ、内面をナデで調整している。内面には指オサエの痕跡が顕著にみられる。色調は灰白色を呈しており焼きがあまい。他の土器と比較すると古い。

2号溝（第9図 図版4④）

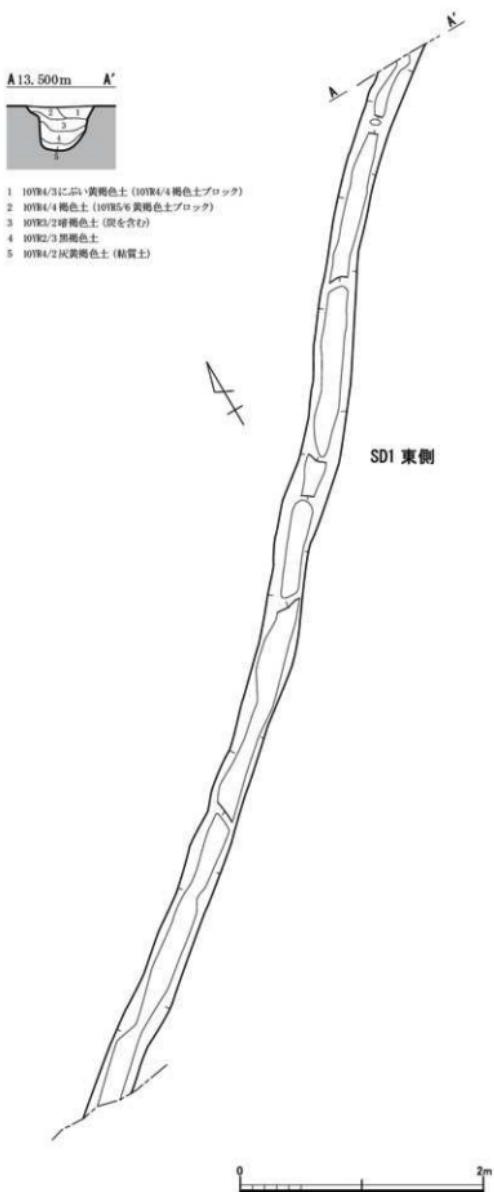
調査区の中央で検出した溝で、標高は13.3m前後である。西側と東側への延長は調査区外に及ぶ。検出した長さは5.4m、幅0.7～1.0m、深さは25cm～50cm程度である。東側の床面はピットが並んでいる。埋土は上層に鉄分を置く含んだ砂質が堆積し、下層になるにつれ黄褐色の砂質へと変化している。遺物が出土していないため時期の特定が困難である。

3号ピット（第3図）

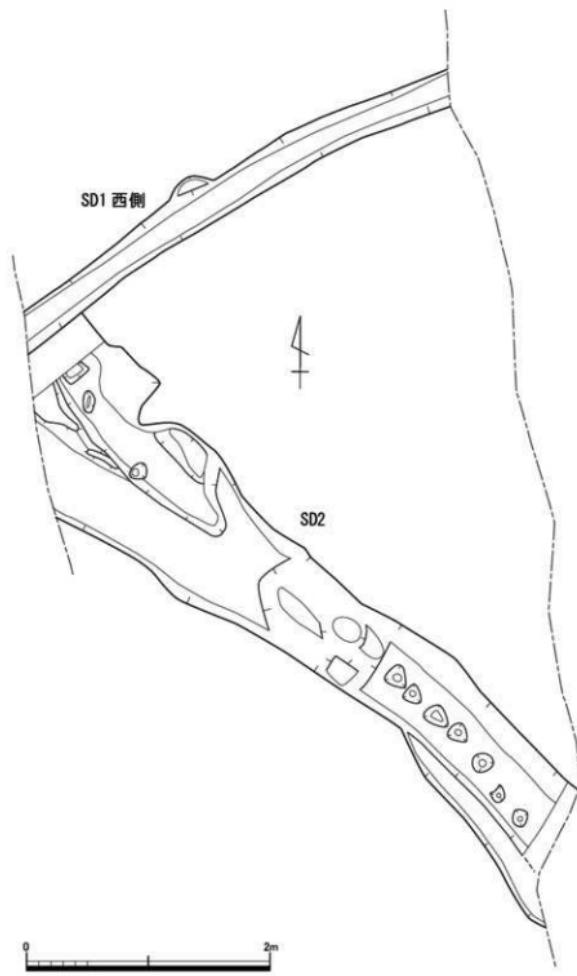
調査区南東側に位置するピットで、標高が高い場所に位置する。ピットの大きさは長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.5～0.6mを測る。複数のテラスを有するピットである。

出土遺物（第10図 図版5）

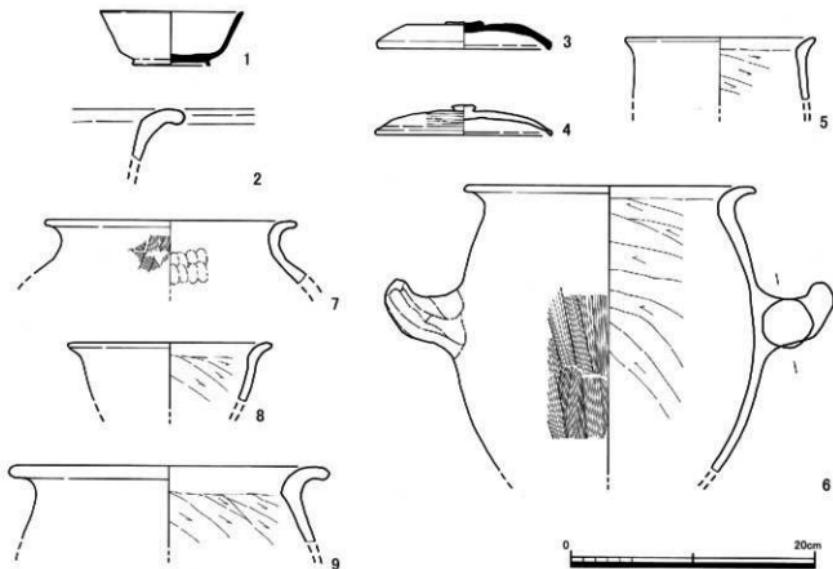
8は土師器の甕である。復元口径16.6cm、残存高4.7cmを測る。色調は褐灰色を呈する。外面と外面口縁部はナデ、内面胴部はケズリを施す。口縁の屈曲はそれほど強くない。同ピットから同一個体と思われる甕の胴部から底部が出土しているが接合はできなかった。外面の一部に煤が付着している。9は土師器の甕である。復元口径25cm、残存高6.2cmを測る。外面および内面口縁部はヨコナデ、内面胴部はケズリを施す。



第8図 1号溝 実測図 (S=1/40)



第9図 1・2号溝 実測図 ($S=1/40$)



第10図 1・4号土坑 1号溝 3号ピット 出土遺物実測図 (S=1/4)

第4章 総括

大板井遺跡31において検出した遺構・遺物について簡潔にまとめておく。

検出した遺構は、堅穴住居1軒、土坑4基、溝2条である。そのほかに多くのピットを確認している。調査区西側が高く、東側に向かって地形が下っている。しかし調査区北側では東西の標高はそれほど変わらない。土坑はこの標高が高い西側に集中し、東側はピットが多い。

時期については1号堅穴住居については貼床の下層の一部を検出したのみで、詳細なことは不明である。貼床の下からは土師器が出土している。時期が特定できるものとして1号溝から7世紀中頃の土師器の甕が出土している。そして2号溝は出土遺物こそなかったが、1号溝に切られているため1号溝より古い溝である。そして1・4号土坑からは7世紀後半から8世紀前半にかけての土師器と須恵器が出土している。この7世紀後半から8世紀前半の時期は隣接する小郡官衙遺跡が最も盛行する時期であり、その時期に調査区周辺も利用されたと思われる。

一方、本調査区の南側に位置する30次調査区では弥生時代中期前半から中期後半の環濠（1区4・6号溝状遺構）を確認している。しかし、本調査では環濠と同時期の遺構（弥生時代中期前半から中期後半）を確認することができなかった。環濠の内側では同時期に遺構が多く見受けられるのに対し、環濠の外側では同時期の遺構の数が圧倒的に少ない。弥生時代における環濠集落の構造を解明する一助を得た。

表1 大板井遺跡31出土遺物観察表

法量=口径径、高台=高台部径、器種=質=質層番号、土=土質番号

探査番号	図版番号	出土遺物	器種	法量 cm ³ (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考	実測番号
第10回 1	図版5	SK1	直: 环	口:(11.8) 高台:(6.4) 器高:(4.4)	褐 黄灰 色 赤褐色	砂粒を含む	良好	内: 回転ナデ 高台: 回転ヘラケズリ	外表面がぶりり、一部赤変	7
第10回 2	図版5	SK1	土・鉢	口:(28.0) 残存高: 4.2	内: 橙 色 外: 黄褐色	砂粒を含む	良好	体・外: ナデ 口縁: ヨコナデ 体: カズリ		1
第10回 3	図版5	SK4	直: 盖	口:(14.2) 器高: 2.2	灰色	砂粒を含む	良好	内: 回転ナデ 天井部: 回転ヘラケズリ		4
第10回 4	図版5	SK4	底下層 土・蓋	口:(14.4) 器高: 2.9	橙色	砂粒を含む	良好	外: ミガキ 内: ナデ		2
第10回 5	図版5	SK4	土: 鏽	口:(15.4) 残存高: (5.0)	内: 黒褐色 外: 灰褐色	砂粒を含む	良好	体・外: ナデ 内: 口縁: ヨコナデ 体: カズリ		1
第10回 6	図版5	SK4	土: 把手付錐	口:(23.0) 残存高: 2.3	内: 黄褐色 外: 橙色	砂粒を含む	良好	体・外: ナデ、ハケメ 体・内: ナデ、カズリ		3
第10回 7	図版5	SD1	土: 鏽	口:(20.0) 残存高: 5.2	内: 浅黄褐色 外: 灰白色	砂粒を含む	やや不良	口・縁: ヨコナデ 内: 押オサエ 体・外: ハケメ		1
第10回 8	図版5	SP3	土: 鏽	口:(16.6) 残存高: 6.7	内: 橙 色 外: 黄灰色	砂粒を含む	良好	口・縁: ヨコナデ 体・内: カズリ 体・外: ヨコナデ	同一個体、あり	2
第10回 9	図版5	SP3	土・甕	口:(33.4) 残存高: 6.5	内: 灰褐色 外: 橙色	砂粒を含む	良好	口: ヨコナデ 体・内: ハラケズリ 体・外: ヨコナデ		1

第111図 大板井遺跡 周辺調査地検出遺構 (S=1/800)



図版



調査区上空から小郡官衙遺跡を臨む（矢印部分が小郡官衙遺跡）

図版 1



① 調査区全景（上空から）



② 北側全景（上空から）



① 南側全景（上空から）



② 調査区中央 全景（南から）



③ 南側調査区 全景（北から）



④ 南側調査区 全景（東から）



⑤ 北側調査区 全景

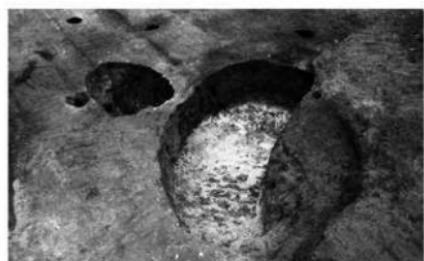
图版 3



① 1号住居



② 1号土坑 土层断面



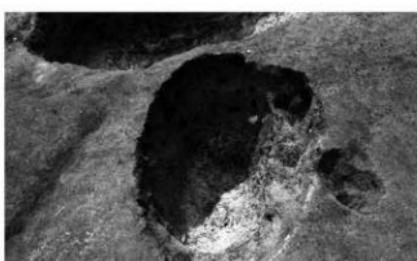
③ 1号土坑



④ 2号土坑



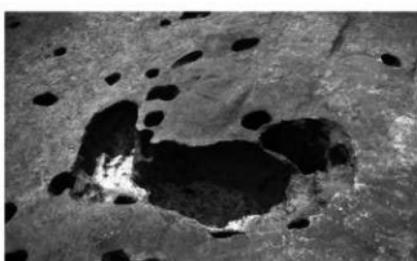
⑤ 3号土坑 土层断面



⑥ 3号土坑



⑦ 4号土坑 土层断面



⑧ 4号土坑

図版 4



① 1号溝 北壁土層断面



② 1号溝 東側



③ 1号溝 西側



④ 2号溝

圖版 5



報告書抄録

ふりがな	おおいたいいせき							
書名	大板井遺跡 31							
副書名	福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告							
巻次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第358集							
編著者名	高橋 涉							
編集機関	小郡市教育委員会 小郡市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 Tel 0942-72-2111							
発行年月日	2024（令和6）年3月31日							
ふりがな	ふりがな	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地							
おおいたいいせき	おごおりしおおおいたい	40216		33°	130°	2022.08.15	650 m ²	宅地造成 (道路部分)
大板井遺跡 31	小郡市大板井			24'	33'	~		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大板井遺跡 31	集落	古代	竪穴住居 土坑 溝	須恵器・土師器				
要約	当遺跡は宝満川の西岸、三国丘陵からなだらかに続く低台地上に位置し、舌状台地のほぼ全体に集落と墓域が展開していたと考えられる。今回の調査では古代の土坑4基、溝2条、竪穴住居1軒、ピットを確認した。当遺跡は西側から東側にむけて地形が下っており、古代の遺構は西側の高い場所に集中していた。また、大板井遺跡30次調査で確認した弥生時代の環濠の外側の場所にあたり、弥生時代の遺構は確認できなかった。弥生集落の環濠の外側の部分についての有意義な調査結果を得られた。そして近接する小郡官衙遺跡との関連をうかがわせる調査結果を得ることができた。							

大板井遺跡 31
小郡市文化財調査報告書 第358集

令和6年3月31日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1

出版 スマートファイブ
福岡県小郡市小郡 1572-9

